出題分析		
試験時間　120 分	**配点**　200 点	**大問数**　4 題（現代文 2、古文 1、漢文 1）
分量（昨年比較）〔減少　同程度　増加〕		**難易度変化**（昨年比較）〔易化　同程度　難化〕

【概評】

〈現代文〉

第一問は、本文の分量は昨年から約 600 字増加した。設問は、総数は昨年と同じ 6 問であったが、解答欄が行のみの形式に戻り、記述の分量は、昨年は 14 行＋80 字＋記号問題であったのが今年は 25 行となり、大幅に増加した。本文の内容は、平易な評論であった。

第二問は、本文の分量は昨年から約 400 字減少した。第一問と同様に、設問は、総数は昨年と同じ 6 問で、解答欄が行のみの形式に戻った。記述の分量は、昨年は 25 行＋80 字であったのが今年は 24 行となり、やや減少した。本文の内容は、平易な評論であった。

〈古文〉

第三問は本文字数 615 字と昨年の約 580 字からやや増加した。設問数も 6 問から 7 問に増加。4 年連続で和歌・文法・文学史について問う問題が出題されている。

〈漢文〉

第四問の本文字数は、【文章Ⅰ】52 字・【文章Ⅱ】161 字・計 213 字と、昨年の 220 字と大きく変わらない。設問数は昨年より 1 問増えた 6 問で、記述量も増加した。

設問別講評

問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
一	現代文（評論） 尹雄大『聞くこと、話すこと。――人が本当のことを口にするとき』	インタビューセッションにおいて聞き手が「完全に聞く」ために必要なことを論じた文章。平易な文章であったが、かなり広い範囲から必要な要素を読み取る必要があり、解答欄を埋めるのは簡単ではない問題であった。内容説明（どういうことか）4 問、理由説明（なぜか）2 問。	やや難
二	現代文（評論） 山下範久「資本主義にとっての有限性と所有の問題」（岸政彦・梶谷懐　編著『所有とは何か――ヒト・社会・資本主義の根源』所収）	資本主義の持続可能性が危ぶまれることの背景にある有限性の問題と、その前提にある存在論的体制の転換について論じた文章。まとめ方が悩ましい問 2 と、本文外から具体例を持ってきて説明しなければならない問 5 を、残り時間と相談して対応する必要があった。内容説明（どういうことか）4 問、理由説明（なぜか）2 問。	やや難

設問別講評			
三	古文（日記） 阿仏尼『うたたね』	鎌倉時代中期の日記文学。出家後、病のために住まいを移そうとする阿仏尼の心中を描く。本文の展開自体に複雑なところはないが、婉曲な表現が読解しにくく、設問にもどのように答えるか迷いやすいものがあった。問 6 は行動に表れた筆者の思いを説明する問題。筆者の境遇を踏まえた丁寧な記述が求められる。現代語訳 1 問、文法問題 1 問、指示部の説明 1 問、内容説明 2 問、和歌 1 問、文学史 1 問。	標準
四	漢文（歴史書） 陳寿『三国志』 裴松之　注	呉の孫権に仕えた諸葛瑾のエピソード。昨年に引き続き、二つのテキストを参照して答える問題が出題された。人物関係の把握がやや難しく、『三国志』に関する基本的な知識の有無も読解に影響したと思われる。設問は、再読文字や句法など、基本事項をいかに正確に理解しているかを問われる内容であった。書き下し文と現代語訳 1 問、内容説明 1 問、返り点 1 問、指示内容を問う現代語訳 1 問、書き下し文 1 問、語句の読み方 1 問。	やや難

合格のための学習法
〈現代文〉 記述解答量は多いが、学習の初期段階では内容重視の丁寧な解答を心がけ、速読・速解の練習はある程度記述力がついてから行なうようにした方がよい。記述力をつけるには要約練習をするのが有効で、できれば指導者に添削してもらうことが望ましい。 〈古文〉 単語・文法など基礎事項の習得と、文章の背景の理解に努め、丁寧な訳文書きの練習を重ねて解釈力を養おう。その他、文学史の知識や和歌の修辞技巧に対する習熟も求められる。 〈漢文〉 重要語・句法など基礎事項の習得、書き下し・現代語訳の訓練、要約練習を怠らないこと。国語便覧や漢和辞典の巻末付録などを使って文学史の知識を蓄えることも忘れずに。